

山は生きもの

古川 久彦

京都大学人間生命学部の相良直彦教授は私の学友です。彼は浜田 稔先生の教えを共に受けた仲間で、日本の動物寄生菌学の第一人者です。院生時代は同僚と共にマツタケのシロに棲息する菌類の調査を行っていました。マツタケ山では、マツタケ菌糸の生育層に隣接して、必ず *Mortierella**¹ 菌の層が存在することを知って非常に不思議に思いました。このことを浜田先生に聞くと、先生は「ことさらにマツタケ菌と *Mortierella* 菌だけを考えるな。木も草も土も菌も、そこに棲む生物全部を含めて山を見なさい。山は一つの生きものである」と答えたそうです。私はこの事を聞いて、浜田先生の自然に対する視野の大きさに、ただただ感銘する他はありませんでした。

この事があってから相良教授は、山という生きもののどこかに何らかの刺激を与えたら、一体どんな反応が現われるだろうかと考えました。彼は、山の裾野で放尿した場所に毎年きのこが発生することにヒントを得て、その刺激に肥料を選んだのです。そして試験地の一面に、アンモニアを散布して様子を観察することにしました。翌秋、その一面から見事に特殊なきのこが発生しました。彼は、これをアンモニア嗜好性菌の新種として発表しました。その後、この菌を指標としてモグラの便所を発見したり、動物の死骸の埋没場所を探知するなど、興味深い論文を数多く発表しています。

~~~~~

登場人物の横顔 (写真提供：関西菌類談話会)

恩師



浜田 稔



今関六也

学友



小川 眞



相良直彦

自然を見る眼の視野の広さは、もう一人の恩師・今関六也先生も同様でした。今関先生はきのこの分類学者であるとともに森林病理学者でもありました。森林に発生する病害の防除は、農薬に頼るのではなく、健康な森林に育てることによって生態的に防除すべきであるという「森林病虫害の生態的防除論」を提唱したことは有名です。天然林が病虫害の被害を受けることなく持続的に健全な姿を保っているのは、老齢化して生理的に衰弱した樹木には自然に腐朽菌が寄生して、やがて倒木となって腐朽分解しその成分は土中に還元される。一方、倒木跡地には十分に陽光が入り、林床に芽生えた稚樹の健全な生育を助ける。人為的な操作が加わらない天然林は、このようにして正常な生態系の循環によってより健康状態が保たれている。もしもこの中に不用意な開発や過剰な伐採が加わると、生態系に異常が生じ病原菌の侵入を許すことになる。これが今関先生の基本的な考え方です。さらに先生は、きのこは環境条件に対して非常に敏感に反応する生物であるから、きのこの生理・生態的性質を知っていれば、きのこを通じてこの場所の立地条件を知ることができることを教えました。同学の友・小川 眞博士は、この教えを体して「きのこを通して森を知る」の著書を著しました。

最近は緑化運動と称して「花を折るな、草木を守ろう」と唱えているが、草木を育てている「土」を守ろうという声はなぜか聞こえてきません。自然を満喫して健康に生きようというので、野山を散策する人は増えているが、野も山もそして土も、全部が一緒になって生きていることを知る人は意外と少ないのです。

山は生きている。自然は生きている。万人心すべきであると思っています。

(1999. 11. 01)

追記

不肖・古川久彦も、小川 眞博士にならって「きのこを通して自然を知る 一和良の集落に理想が見えた一」(2013 年 1 月、岐阜新聞社)*²を著しました。なお、本稿は「きのこ学閑話」297 編中の一つである事を申し添えておきます。

(2013. 02. 25)

*1 *Mortierella* = クサレカカビ属

*2 「きのこを通して自然を知る 一和良の集落に理想が見えた一」は、会報 29 号で紹介。



—*—*—*—*—*—*—*

※クサレカカビについて興味をもたれた方は、「月刊たくさんのふしぎ クサレカカビのクー」がおすすめ。会報 22 号に紹介記事があります。(編)

